

平成 30 年 3 月 14 日

寮生保護者各位

髄膜炎菌感染症について(お知らせ)

愛光中学・高等学校
校長 中村 道郎

髄膜炎菌は、健康な人も持っている細菌で、誰でも感染する可能性があります。

2011 年、宮崎県にある高等学校の全寮制運動部寮で侵襲性髄膜炎菌感染症 (IMD) の集団感染が発生し、1 名が死亡した事例がありました。しかしながら、髄膜炎はワクチン接種で予防できる病気です。

この度、本校では、学校の寮などで集団生活を送る人が推奨接種者となっていることを受け、学校医と相談の上、寮生の保護者へ情報をお知らせすることといたしました。

つきましては、裏面に資料を掲載しておりますのでご覧ください。

予防接種そのものは、任意の予防接種であり、学校及び寮では取り扱っておりません。各ご家庭で検討され、病院でご相談いただきますようお願いいたします。

「細菌性髄膜炎」という病気を 知っていますか？

脳や脊髄を保護する膜の髄膜に、細菌が感染して炎症が起きた状態を細菌性髄膜炎と呼びます。原因となる細菌には、インフルエンザ菌(ヒブ)や肺炎球菌、そして**髄膜炎菌**という原因菌があります。髄膜炎菌による髄膜炎は、咳やくしゃみなどによりヒトからヒトに移り、急激に重症化することがあります。



髄膜炎菌感染症とはどんな病気ですか？

最初は風邪に似た症状で診断が難しく、急速に悪くなることがあります。発症から24~48時間以内に死亡することもあります。適切な治療で回復しても難聴や神経障害、循環不全による壊死による手足の切断などの後遺症が報告されています。

■後遺症の種類

- ・広範な組織壊死による手足の切断
- ・神経障害 　・聴覚障害 　・痙攣
- ・麻痺 　・精神発達障害 など

髄膜炎菌による髄膜炎や敗血症（侵襲性髄膜炎菌感染症）は、どんな人や場所で多くみられますか？

髄膜炎菌による髄膜炎や敗血症（侵襲性髄膜炎菌感染症）は、乳児や5歳未満の子ども、11~19歳の学童や青少年に多くみられます。また、学生寮や部活動などの**集団生活の場**では、感染が広がりやすいので注意が必要です。

海外でも流行している地域があり、欧米では散発的に流行がみられています。

■日常生活に潜む侵襲性髄膜炎菌感染症(IMD)罹患のリスク例



これらに限らず、飛沫(せき、くしゃみ)で感染することがあります

1)Centers for Disease Control and Prevention: Epidemiology and Prevention of Vaccine-Preventable Diseases.

2)Meningococcal - The Green Book, Chapter 22

3)Immunization Action Coalition Meningococcal : Questions and Answers

(2016年9月15日アクセス : <http://www.iam.org/catg/d/p4210.pdf>)

髄膜炎菌感染症のリスクは、日常生活の中にも！

髄膜炎菌による感染症は、ワクチンを打っておくことで予防することができます。

髄膜炎菌による感染症は、気づくのが難しく、治療が遅れる可能性が高いため、ワクチンの接種によってあらかじめ予防しておくことが重要です。一回ワクチンを接種すると、数年間は予防効果が続き、髄膜炎菌による感染症を抑えることができます。寮生活がスタートしてからしばらくは、環境の変化や慣れない集団生活によるストレスや疲れで免疫力が下がることも予想されます。

免疫力が低下した状態で多くの人が集まる環境にいると、感染症にかかる危険性がいっそう高まるので、ワクチンは寮生活がスタートする前に接種しておくことが効果的と考えられます。期待に満ちた新生活を、不安なくスタートさせるための準備のひとつとして、ワクチンの接種を検討しておきましょう。

（髄膜炎菌にはいくつかの血清群がありますが、日本で承認されている髄膜炎菌ワクチンはそのうち感染例の多いといわれる、A, C, Y, W の4つの血清群に有用です）

ワクチンの接種は、学校の寮など集団生活を始める4週間前までに。まずは、かかりつけのお医者さんに相談してみましょう。

ワクチンは、注射を打ってからすぐに効果が出るわけではありません。体の中で、髄膜炎菌に対する抗体ができるまでには4週間程度かかります。また、ワクチンを取り寄せるのに時間がかかる場合もありますので、学校の寮など集団生活に入る日から逆算して、4週間前までには、かかりつけのお医者さんに相談するようしましょう。

※費用は医療機関によって異なりますが2万4千円前後です

< サノフィ株式会社ホームページ及びパンフレット等より抜粋 >

アメリカでの調査では、寮生活や軍隊などの集団生活を送っている場合の感染リスクは2~4倍となっております。そのためアメリカでは発症リスクが高くなる前の11~12歳で定期接種となっております。その5年後に2回目の接種をおこなっております。

日本からアメリカへ留学する場合にも（州や寮生活の有無によっても異なりますが）髄膜炎菌ワクチンの接種を求められる場合が多くなっています。

髄膜炎菌感染症は重篤性が高いことや、世界では発生頻度も高いことから、世界各国で髄膜炎菌ワクチンは使用されています。アメリカでは思春期を対象とした定期接種プログラムに入っています。日本で承認されているワクチンは、アメリカで承認されているものと同じ4価ワクチンであり、世界では55カ国で承認を受け、すでに7000万回以上の接種が行われています。